

2025年度

「学生が選ぶベストティーチャー賞」 受賞者発表

学生のみなさん、ご投票ありがとうございました。

1,429件の投票の結果、以下11名の先生方が2025年度
「学生が選ぶベストティーチャー賞」受賞者として決定しました。

テーマ

法政一受けたい授業 -人生を変えた先生-

教養部門

細沼 祐介（兼任講師）
山本 晃輔（理工学部准教授）

専門部門

岡田 庄生（経営学部准教授）
加茂 明（兼任講師）
JOEL A VAN FOSSEN（グローバル教養学部助教）
新谷 優（グローバル教養学部教授）
波戸岡 景太（文学部教授）
松本 悟（国際文化学部教授）
李 舜志（社会学部准教授）

語学
グローバル
部門

IVAN BOTEV（兼任講師）
戸田 博之（兼任講師）

殿堂
入り

新谷 優（グローバル教養学部教授）
細沼 祐介（兼任講師）
李 舜志（社会学部准教授）

※五十音順、敬称略

*なお、以下の先生方は、既に殿堂入りされている先生です。

殿堂入りとは、5年度以内に3回受賞した教員を対象とし、殿堂入り後は選出対象となりません。



後藤 一美（法学部教授）
塩崎 公靖（兼任講師）
鈴木 美伸（兼任講師）
徐 玄九（兼任講師）

富所 明秀（兼任講師）
植木 紀子（法学部教授）
川島 健司（経営学部教授）
辻本 昭彦（生命科学部任期付准教授）

※受賞年度順、敬称略
※殿堂入り教員の所属・身分は受賞当時のもの

<主催>
教育開発支援機構「学生が選ぶベストティーチャー賞」実行委員会

2025年度

学生が選ぶベストティーチャー賞



ベストコメント賞発表

授業内容も勿論の事、先生の“学生一人一人に真摯に向き合う姿勢”に深く感銘を受けました。毎週、全員のリアクションペーパーを必ず読み、全員に丁寧なフィードバックを必ず送って下さいました。私の価値観や悩み・努力を受け止めて下さり、コメントを読む度に、先生が本気で理解しようとして下さっている事が伝わりました。授業では、キャリアの枠を超えて“どう生きるか”を考える重要性を教えて頂き、

- ①失敗を恐れず挑戦する事
- ②自分の強みや価値観を見つめる事
- ③他者との関わりの中で役割を見つける事

の重要性を学び、行動の変化へと繋がりました。小さな努力も見逃さず励まして下さり、頂いたお言葉は大きな支えとなりました。授業を通して、自分の考え方や行動が確実に変化したと実感しています。

以上の理由から私は、先生こそが最も学生に寄り添い、最も成長を引き出して下さる教員であると確信した為、先生を強く推薦致します。



私がゼミに入ってから取り組みたいと考えていたテーマは、周囲の学生から「現実的ではない」「無理ではないか」と言われ、笑われてしまうこともありました。しかし先生は、その考えを否定することなく「とても面白い視点だ」と言ってくださいました。その一言に、私は大きく勇気づけられました。先生は、私の関心に合わせて勉強になりそうな専門書を貸してくださったり、関連するニュースや社会の動きを紹介してくださったりしました。また、漠然としていた目標をどのように具体化し、段階的に設定して進めていけばよいのかについても、丁寧にアドバイスをしてくださいました。特に印象に残っているのは、先生の専門である環境経済学の視点から、私のやりたいことをどのように学問的に捉え直せるかを教えていただいたことです。環境経済の関係を踏まえながら考えることで、自分の興味が社会とどのようにつながっているのかを理解できるようになりました。





私は先生の基礎演習を履修し、この授業を通して多くの刺激と学びを得てきました。先生の基礎演習では、本や映画を題材とした討論会や、指定されたテーマに基づくディベートが行われます。課題として提示される本や映画は、私自身では選ばなかったであろう作品が多く、自分がこれまで踏み入れることのなかった分野に触れる貴重な機会となっています。また、討論やディベート終了後には、先生から丁寧なフィードバックがあり、自分たちでは気づけなかった点を具体的にご指導いただけます。さらに先生は、議論の内容だけでなく、言葉遣いや表現についても指摘してくださいます。何気なく使っていた言葉の中に、実は不適切な文法や曖昧な表現が含まれていたことに気づかされる場面も多くありました。これらの理由から、学生一人一人の思考力と表現力を真摯に育ててくださる先生こそ、ベストティーチャー賞にふさわしい先生だと強く感じています。



私は初めて日本の伝統文化である狂言について勉強しました。今まで狂言は年配の方が見るものと思っていた、特に興味を抱いていませんでした。しかし、実際にビデオを観て、舞台の一体感を大切にして、庶民の日常の笑いの一場面を切り取った狂言に面白さを感じました。このように実際に見て面白いと感じたのですが、先生の授業の仕方も狂言に興味を持つ一つの要因になったと感じています。ビデオを観る前に受講生が狂言の台本を順番に読んでいくという形式でした。自分で声に出して読むことで、魅力を感じられました。旧字のような読みにくい字や、内容が難しい部分は、先生がフォローしてくださり、また、現代訳をつけてくださったおかげで、観る前に大まかな内容を理解することができたので、より面白さを理解できたと思っています。この授業がなければ今後狂言に触れる機会がなかったかもしれないのに、面白さを伝えてくれた先生には感謝しています。





先生の授業を通じて、公民とは単なる教科ではなく、人生の中で身につけておくべき知識や考え方のことだと学びました。公民を担当する教員は子どもたちが知識を得た先に何を見出すのかを考えながら授業を作っていくなければならないこと、子どもたちの将来を大きく左右する責任の重大性、未来を形作ることのできる喜びがあることを実感しました。考え方方が変わるだけではなく、授業スキルも学ぶことができます。参加型学習の手法をたくさん教えていただき、子どもたちをどのように惹きつけていくのか、どのようにして子どもたちが輝く機会を作っていくのか、そのベースとなるスキルを教えていただきました。きっと、先生は私たちを通じて、これから先を生きる子どもたちと社会とを繋がせようとしているのだろうなと感じました。その想いをしっかり繋いでいこうと思うとともに、自分自身が中高で学んできたものは何だったのだろうと考え直す良い機会となりました。



私が法政一受けたい、また受けてほしいと思う理由は、学習内容を通して「考え方」そのものを深く身につけられる環境があると感じたからです。これまでの学習の中で、データ構造とアルゴリズムに取り組んだ経験が、私の考え方を大きく変えました。単に答えを出すのではなく、「どのような手順で処理すれば効率がよいのか」「なぜこの方法が最適なのか」を論理的に考える必要があり、試行錯誤を重ねる中で、物事を順序立てて考える力が身についたと感じています。この経験から、知識を覚えるだけでなく、自分で考え、工夫し、より良い方法を追求する学びの重要性を実感しました。法政一の探究的な学びの環境で、この姿勢をさらに伸ばし、将来に生かせる思考力を身につけたいと考えています。



※上記コメントは、投票いただいたコメントに一部修正を加えて掲載しています。

主催：教育開発支援機構「学生が選ぶベストティーチャー賞」実行委員会

